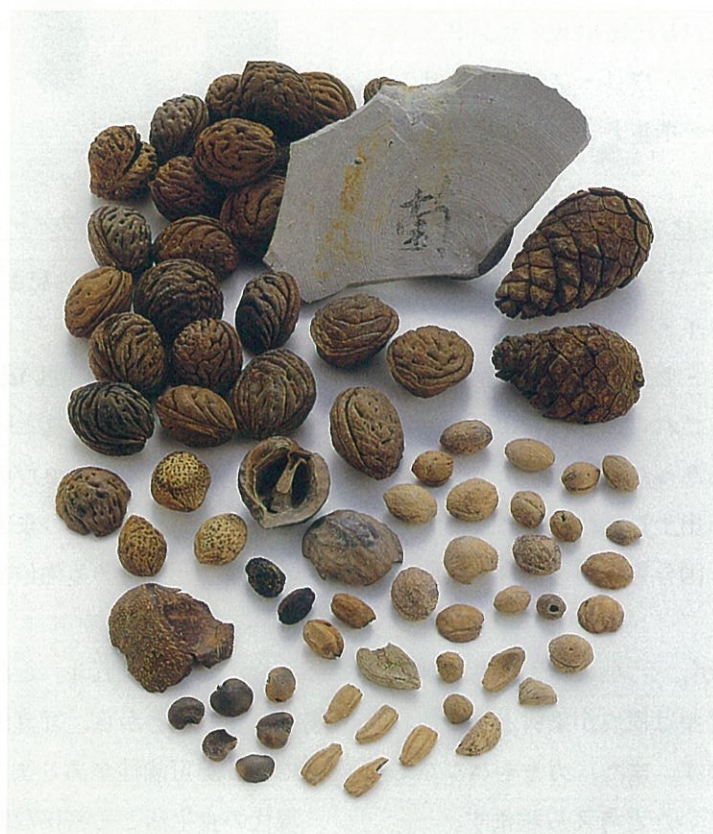


阿岐のまほろば

Vol. 31

国分寺の食と癒し^{いや}



安芸国分寺出土「菌」墨書土器と種子

安芸国分寺では、これまでの発掘調査で塔と金堂・講堂・軒廊・僧房などといった宗教施設の位置や規模が確認されています。また、この他に国分寺の管理責任者がいた国師院や講師院、寺務や施設管理を行っていた大衆院と考えられる建物群も明らかになってきました。

さらに、昨年度の第19次調査では、大衆院の一角から「菌」と記された墨書土器が出土したことから、

菌畠（菌院）とそれを管理する施設も存在していたことが推定されるようになりました。

菌畠には、野菜や穀物の他に桑・芋・藍・茜など、多種多様な作物が植えられていたとされています。

しかし、その詳細については不明な点が多く、こうした作物内容を明らかにすることで、国分寺の活動の一端を探ることができると考えられます。

古代のゴミ捨て穴は貴重な情報源

寺域の東端で検出されたゴミ捨て穴（SK451）や金堂跡の北東角で検出されたゴミ捨て穴（SK09）からは、何種類もの花粉や種子が出土しています。

寺域東端のゴミ捨て穴（SK451）からは天平勝寶二年（750）銘木簡や、国分寺創建期に使用された瓦が出土していることから、8世紀中ごろのものであることがわかっています。

そして、箸・曲物・杓^{しやもじ}文字とともにカヤ・ハシバミ・モモ・スモモ・オニグルミ・ウメ・センダン・ヒョウタン・マツ・コブシ・ウリ・クスノキ・サンショウ・イヌザンショウ・ホルトノキなど種子が出土しました。

金堂跡の北東角のゴミ捨て穴（SK09）からは、モミ・マツ・スギ・コウヤマキ・ヒノキ・ヤマモモ・ノグルミ・クリ・シイ・サンショウ・ウルシ・カエデ・イネ・アブラナ・セリ・ナス・キクなどの花粉が検出されました。これらの植物の中には人の手で運び込まれたものもあったでしょうが、なかには花粉と種子が両方とも出土した植物もあり、大半は園院で栽培されるか、国分寺の周辺に自生していたものと考えられます。

ほとんどが食用ですが、クスノキは防虫剤や建材・家具材に、ホルトノキは樹皮が染料として使われていた可能性があります。また、カヤやハシバミからは灯明油を採取していたと考えられます。

奈良時代の文献には、これらの植物以外にも様々な食用植物が記されています。

菜食中心であったとすると、穀物は大麦・小麦・アワ・キビ・大豆・ソバ・ヒエ、野菜・キノコ類にはカブ・チシャ・フキ・ワラビ・タラ・クズ・ウリ・キュウリ・ナス・サトイモ・ジネンジョ・ダイコン・ネギ・ニンニク・タケノコ・マツタケなどがあり、海藻類ではコンブ・ワカメ・ヒジキ・テングサ・ノリなどが食されていたと考えられます。



食品名の記された木簡

運ばれてきた食料の使いみち

安芸国分寺では、付札^{つけふだ}と呼ばれる古代の送り票から、米・小豆・サンショウの実（榎子）が運び込まれていた事がわかっています。また、米は古代安芸国の郡のひとつである佐伯郡から送られてきたようです。

さらに、都で「五斗」と記された米は白米である場合が多いことから、写真の木簡に記された米も白米であった可能性があります。

現代の食生活とも密接な関係をもつ米・小豆・サンショウは、古代においては食用とされただけでなく、以下のような利用方法がありました。

米はその粘着質を利用して、薬の外形を整える役割をもっていました。また、建築用の部材などに顔料を定着させるための糊剤として用いられることもありました。

小豆は、その粉末を洗剤として利用しました。修行僧が全身に湿疹ができて悩んでいることを仏に打ち明けたところ、小豆で身を清めるようにという答えが帰ってきたという逸話があるほどです。

サンショウは付札だけでなく、種子そのものも出土しました。文字史料と考古学的資料が一致する貴重な例です。この植物は薬として用いられていたようで、そこに国分寺の日常的な活動を知るヒントがあるようです。

古代の薬局？

安芸国分寺からは、サンショウだけでなく、モモ・スモモ・オニグルミ・ウメ・センダン・マツ・コブシ・クスノキ・クリなど、薬用効果のあった植物の種子が多数出土しています。果物・野菜・香辛料としてなじみ深いこれらの食物ですが、実は薬としての効果もあるものばかりなのです。現在までに知られている各植物の効能は、以下のとおりです。

モモ 種子の中にある仁の部分が、便秘に効くとされています。花をつぼみのうちに採取したものは利尿や鎮静効果などがあり、気管支炎などに効く薬として用いられます。葉には抗菌作用があると考えられています。

ただし、現在食されているモモは明治8年に中国から輸入されたモモを品種改良したもので、古墳時代や奈良時代のモモとも品種が異なります。

スモモ モモと同様に果実は食用ですが、生葉には抗菌作用があります。

オニグルミ 実が滋養・強壯の薬、葉を煎じたものは虫さされ薬や毛生え薬に用いられます。

ウメ 青梅をいぶし焼きにした烏梅に抗菌・整腸・解熱・虫下しの効果があります。

センダン 古代では「オオチ」と呼ばれていました。実は腹痛に、幹の皮は虫下しとして用いられました。また、生の果実はすりつぶすとひびやあかぎれに効く塗り薬になると考えられています。

マツ 松脂は打撲やあかぎれなどに効く軟膏の材料として用いられました。若葉は不眠症の薬として、松かさの粉末は抗菌や虫下しの効果があると考えられています。

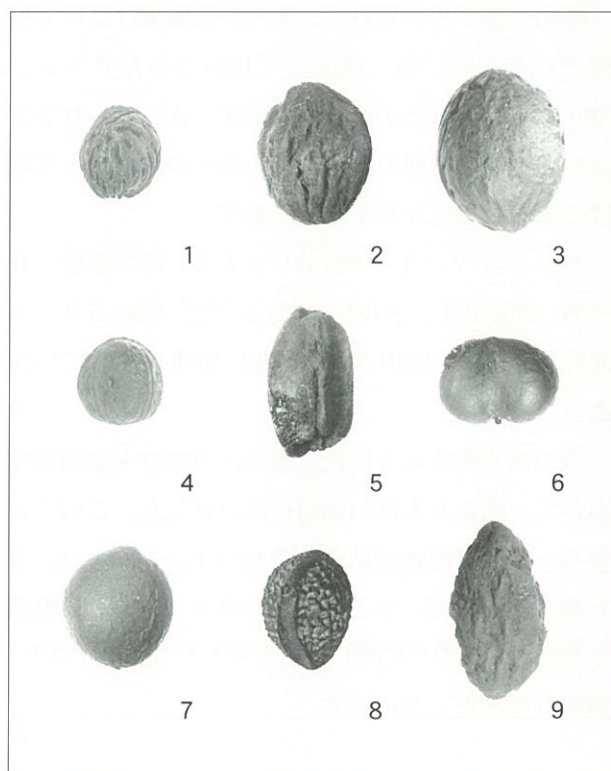
コブシ 花のつぼみを乾燥させたものが蓄膿症や頭痛に効く薬として用いられます。

クスノキ 材・枝・葉から防腐剤（樟脳）・強心剤・打撲用の塗薬として用いられます。

サンショウ 熟した果実から種子を取り除いたものが胃薬や虫下しとして用いられます。また、虫刺されにはこれらを煎じたものを塗ると効果があります。

クリ 葉やイガが、かぶれや火傷の消毒薬として用いられます。

以上のような薬用植物と、ウリやヒョウタンのような食用植物、染料や灯明油の原料となった植物が、人の手を借りずに一か所に集まるとは考えにくいことから、国分寺で利用・栽培されていたと考えられます。



安芸国分寺出土の種子実体顕微鏡写真

1. モモ (0.5倍)、2. ヤマモモ (2.5倍)、3. スモモ (1.9倍)、4. オニグルミ (0.5倍)、5. センダン (1.9倍)、6. コブシ (1.9倍)、7. クスノキ (2.5倍)、8. イヌザンショウ (5倍)、9. ホルトノキ (1.9倍)

大切な保存食

木製品や種子が出土した寺域東端のゴミ捨て穴（SK451）からは大量の焼き塩壺も出土しています。焼き塩とは、作りたての塩を小型の土器につめかえて熱を加え、保存・運搬しやすくしたものです。堅く焼き締まった塩を壺から取り出すのに、粉々に壊していたようです。

塩は主に調味料として用いられていましたが、その中でも漬物をつくるのに大きな役割を果たしていました。現代のように冷蔵庫や冷凍庫があって食料品を長期間保存できない古代においては、ウリ・ナス・ネギ・セリ・ワラビ・サンショウ・ミョウガ・コブシ・モモ・大豆・青菜などを塩・味噌・^{ひしお}醬（醤油の原型）などに漬けこむことしかできませんでした。塩が味噌や醬の原材料であったことも忘れてはなりません。

味噌や^{ひしお}醬が用いられず、明らかに塩漬けだけで保存されたものには、薬として用いられたサンショウ・コブシ・モモがあげられます。さらに、サンショウやコブシは他のものよりも多くの塩を使って漬けこまれたことがわかっています。

サンショウ一斗^{*}（約7.4リットル）につき塩一升一合（約0.8リットル）、コブシ二升（約1.5リットル）に塩5合（約0.4リットル）が用いられていたようです。

今では当然のように使う塩も、当時は大変貴重なもので、米よりも高い価値がありました。このことから、古代の漬物が私たちのもつイメージとは、少し異なるものだったと考えられます。それらは野菜や果物の取れない時期には欠かせない食料源であり、貴重なものだったのです。

国分寺、もう一つの役割

安芸国分寺で出土した種子や花粉、木簡の記述や製塩土器から復元できる古代の食は癒しにも通じ、想像以上に豊かで無駄のないものであったと考えら



焼き塩壺

れます。そして、それらの食物には薬用効果のあるものが多いことから、国分寺の「蘭」が単なる畑ではなく、薬草園のようなものでもあったといえます。

本来、国分寺は国家の安泰を祈念するための国家的な宗教施設でしたが、そのような薬草園が営まれていたことから、宗教施設としての役割だけを担っていたのではないと考えられます。

国分寺のもう一つの顔…、それは最先端を行く医療センターであったともいえるでしょう。

荘厳華麗な建築と、そこに集まる最高水準の英知は、律令体制の象徴でもありました。

しかし、仏教の教えが浸透するにつれ、仏の加護を求めて集まる人々や、病に苦しむ人々にとっても心のよりどころとなっていたと考えられます。

【文責：関廣】

☆ 古代の文献に記された白米のことで、これが現在の白米と同じ程度のつき方であったかどうかはわかりません。

* 古代の一斗は、現在の量（約18リットル）の約4割に相当します。

（働）東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿岐のまほろば Vol. 31

発行日 2004（平成16）年6月30日

編集・発行 財団法人東広島市教育文化振興事業団/文化財センター
東広島市西条町大字馬木541-1

TEL 082-425-3880 〒739-0033

印刷 株式会社 ニシキプリント

広島市西区商工センター7丁目5-33